

新枢機卿任命

法王ヴェネディクト 16 世は 2 月 18 日新枢機卿 22 名を任命した。この 22 名は既に今年初めから噂されていた人たちで一人として違っていなかった。これで枢機卿の総人数は 213 名になった。そのうち、ローマ法王を選ぶコンクラーベ選挙に参加できる人は、80 歳以下という規定があるために、現時点で 125 名である。残りの 88 名は 80 歳以上で、コンクラーベ出席の資格はない。

任命された人たちは、ヨーロッパから 16 名（内イタリア人 7 名）、アメリカから 4 名、アジアからは 2 名であった。これで枢機卿の分布図はヨーロッパが 119 名（コンクラーベ参加可能者 87 名、以下同）、北アメリカが 21 名（15 名）、アフリカが 17 名（11 名）、アジア 20 名（9 名）、大洋州 4 名（1 名）、ラテン・アメリカが 32 名（22 名）である。イタリア人だけを見た場合、枢機卿の数は 52 名で、そのうちコンクラーベに参加できるのは 30 名である。前回 2005 年のコンクラーベの時には、イタリア人の選挙出席可能者は全体の 17% だった。今回イタリア人が増えたので、その比率は 24% を占めるようになる。そのために次期法王はイタリア人から選出されるという推測が強くなっている。

今回任命された枢機卿のうち、内外に一番良く知られているのは、ベルギー人で宗教史が専門の 92 歳のジュリアン・リース氏だ。22 人のうち 10 人は国務長官タルチジオ・ベルトーネに近い人たちだ。ドイツ人のライナー・マリア・ヴェルキオ氏は、枢機卿の中で一番若く、本年 55 歳。今回アフリカ人の枢機卿は一人も任命されていない。日本人の枢機卿も、数年前に浜尾、白柳両枢機卿が共に出直しているの、ゼロになっている。

任命式において、新枢機卿たちは一人ひとり呼び出されてローマ法王に近づき、法王の前にひざまずく。そして法王から枢機卿用の緋法冠を頭に載せられ、またローマに数ある教会の一つの責任者として任命される。さらに、法王は枢機卿任命の大勅書を手渡し、新枢機卿と抱擁を交わす。新枢機卿たちは、任命式の前日にローマ法王の手から直接指輪がはめられる。

新枢機卿たちは、ローマ法王から枢機卿の品位を保つために「キリストの血」を表わす印を受ける。それは「愛の奉仕」精神であり、具体的には「神への愛」「教会への愛」と「絶対的かつ無条件の献身的きょうだい愛」である。さらに教会奉仕のための 8 つの規範が読み上げられる。その 8 つとは、「愛」「力強さ」「澄」「賢」「気力」「堅」「信」「勇」である。

枢機卿任命式は現代イタリア語で「conclistoro」と言っている。語源はラテン語の「consistorium」である。起源的にはローマ帝国時代に「sacro conclistoro」と言って、皇帝の側近の協力者によって構成されていた皇帝の私的評議会のことだった。それをヴァチカンが受け継いで、ローマ法王側近の枢機卿評議会となった。この評議会はヴァチカン内に設置され、法王によって招集されるようになった。

この conclistoro の儀式の時には世界に散らばっている全枢

機卿がローマに集まり、ローマ法王の説教を聞き、新枢機卿たちを祝福するようになっている。

今回の conclistoro に参加した枢機卿たちは、22 人の新枢機卿を含んだ総数 213 人のうち、133 名であった。実に 80 名が欠席した。欠席の理由は高齢とか病気とか緊急の用件が出来たためと言われている。理由がはっきりしていれば欠席は大目に見られる。しかし、ある枢機卿のように、普段はローマに常駐しているのに、わざわざ前日にローマを離れているといった例もある。前回 2010 年の時に出席した枢機卿は 150 名だった。

キリスト教のこの 1 世紀の伸展状況

ユダヤに生まれたキリスト教は、ユダヤ人の宗教から遠ざかり、世界宗教へと歩みを始めた。復活したキリストを見た弟子たち、特に十二使徒は一晚のうちに自分が伝道に行く地の言葉を話し始めたという。聖ピエトロが伝道に来て、没した所がローマでヴァチカンの丘の麓に葬られた。313 年にキリスト教がローマで公認されるや、聖ピエトロの墓の上に、326 年には教会が出来上がり「キリスト教の総本山」の役割を持った。現在はカソリックの総本山として、サン・ピエトロ教会がその勇姿を保っており、「神の代理人」と言われる法王が起居し、法王の勅令が発せられる。カソリックは法王を中心に動いている。

キリスト教は早い時期にヨーロッパを席卷した。各地の土着の信仰との争いにも勝利を取め、各地で国教化された。そして、ヨーロッパ諸国が、特に英、仏、西により新大陸進出がなされる頃、伝道師たちも新大陸に渡り、それぞれの地にキリスト教の教会が出来上がり、それぞれの地で、土着の信仰を退け、第一の宗教に踊りだしている。

1517 年にプロテスタントが生まれるや、ヨーロッパの宗教分布図は新教と旧教に分かれ、旧教の基盤が縮小されていった。そういう時にカソリックの勢力を拡大するために、1534 年にイエズス会が生まれ、アジアを中心に東の方へ教えが広がった。こうしてカソリックは世界全体に教えが広まったのである。

しかし、ここで注目したいのは、キリスト教全体がこの 100 年の間にいかに伸び広がり、信者数を増やしたかということである。1910 年と 2010 年の各地の信者数（2012 年 1 月 8 日付イタリアの新聞『CORRIERA DELLA SERA』の統計から）を見てみると、ヨーロッパ全体（ロシアを含む）では、4 億から 5 億とそれほど際だった増加はしていないが、その一方で、南北アメリカ大陸では 1 億人だったのが 8 億人に、アジア大洋州では 4 千万だったのが 3 億人を超え、さらにアフリカ、とりわけサハラ以南の地域では 1910 年には 1 千万足らずだったのが 100 年後には 5 億人を数えるようになった。この 1 世紀の間でキリスト教が世界中に広がっているのである。キリスト教徒の比率は世界人口の約 30% とも言われている。そしてその中でもとりわけ、南北アメリカやアジア、サハラ砂漠以南のアフリカでのキリスト教の伸展が著しい。

こういうところからこれから先、アメリカ人の法王、あるいはアフリカやアジア出身の法王が誕生するだろうと言われている。